

# 市史だより

F u k u o k a

23

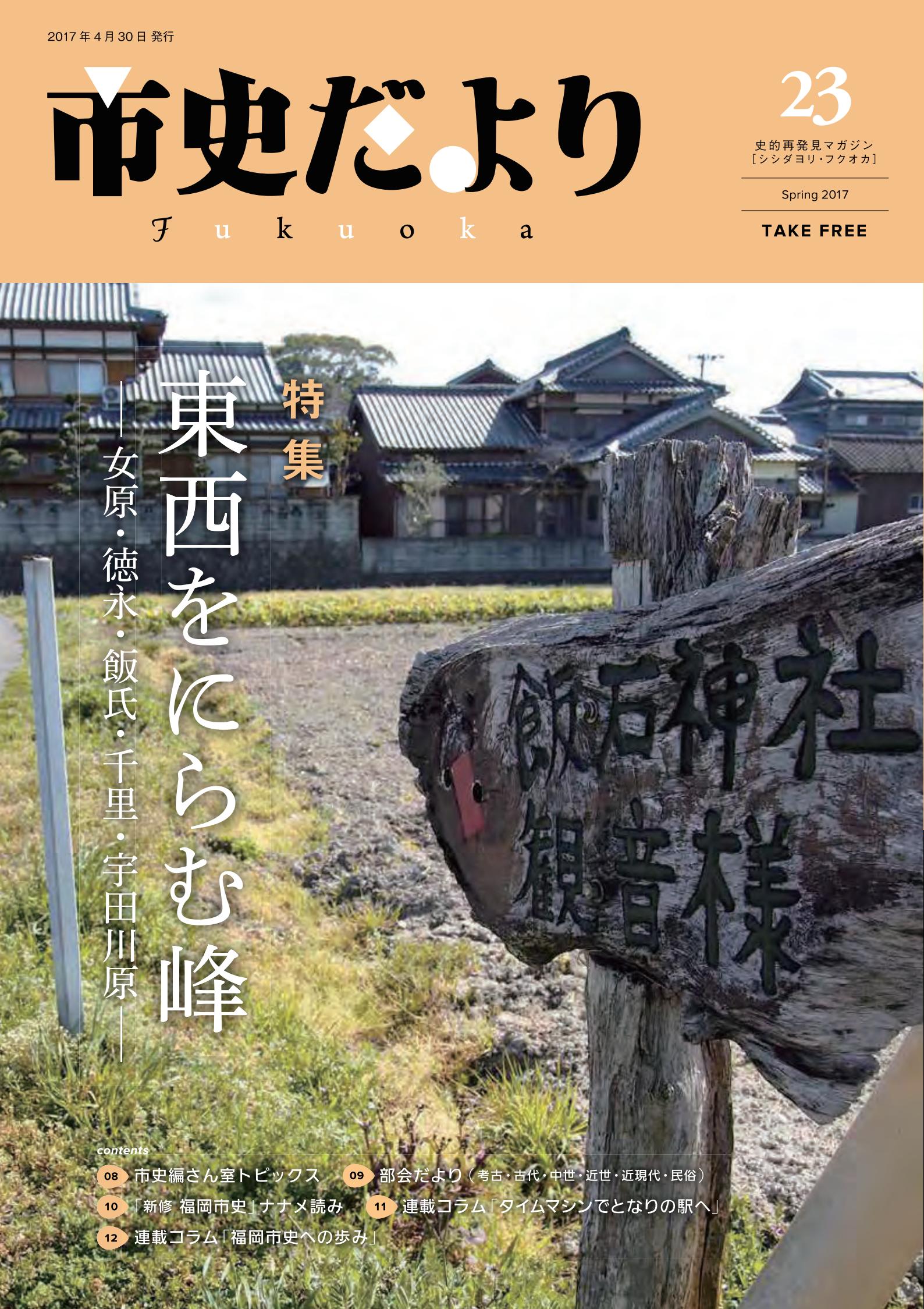
史的再発見マガジン  
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring 2017

TAKE FREE

女原・徳永・飯氏・千里・宇田川原  
東西をにらむ峰

特集



新修福岡市史  
福岡市

contents

- 08 市史編さん室トピックス
- 09 部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）
- 10 「新修 福岡市史」ナナメ読み
- 11 連載コラム「タイムマシンでとなりの駅へ」
- 12 連載コラム「福岡市史への歩み」

特集

# 東西をにらむ峰

— 女原・徳永・飯氏・千里・宇田川原 —

福岡市の西の端にあって、  
深い緑が印象に残る山々。  
東西を隔てた  
峰をめぐる人々の歴史。

文=市史編さん室



福岡市の西端には、女原・徳永・飯氏・千里・宇田川原のまちが並んでいます。今ではすっかり埋め立てられて市街地化しましたが、近世までこの地域の北東側には、今津湾に面した干潟が広がっていました。その一方で、女原・徳永・

飯氏・千里では、高祖山から北に向かって丘陵が八手状に長くのびています。

北側に海岸が迫り、平野が狭くなっているな

かで、丘陵の峰は、人の往来をさまたげ、西の糸島平野と東の早良平野とを隔てる壁のような場所っていました。

今回は東西を隔て、両側ににらみをきかせていた峰に注目しながら、この地域の歴史を追つてみましょう。

## 丘陵をめぐる古いくらし——壁、前史——

丘陵の間からは、縄文時代の狩猟の道具が見つかっており、早くからこの地域で人々がくらし始めたことが分かります（徳永A・B遺跡）。また、

糸島平野に接する台地上では、弥生時代の墓地が見つかっており、周辺では、これと同じ時期の集落も発見されました（飯氏遺跡）。甕棺墓の形の変遷などを見ると、弥生時代にこの場所でくらした人々は、西側の糸島地域と同じ文化圏であつたようです。

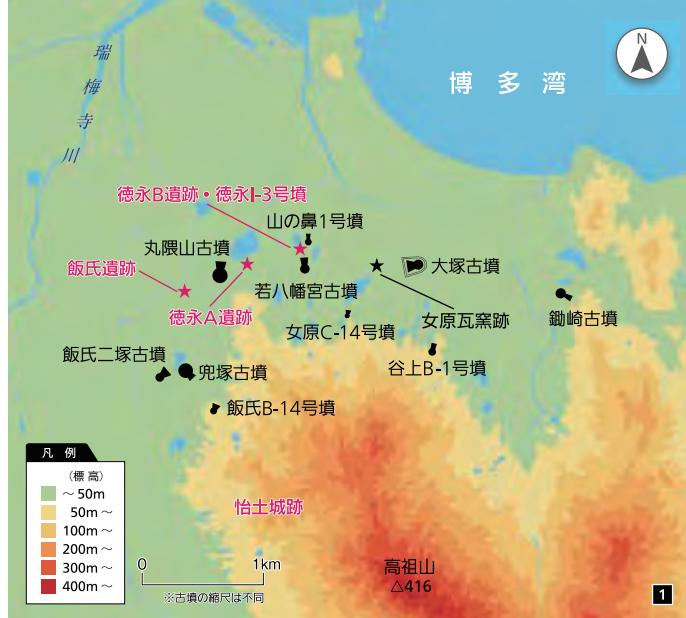
四世紀になると、高祖山北麓から東側の叶岳（かのつだけ）北西麓の丘陵部にかけての広い範囲に、古墳がつくられ始めました。古墳は七世紀後半頃まで

築かれ、その数は前方後円墳が一二基（消滅したものも含む）、群集墳が約五〇基にものぼっています（今宿地区古墳群）。

これらのうち、最近の調査で見つかった徳永古墳群I・三号墳（五世紀前半頃、直徑約一〇メートル）には、特に注目が集まっています。この古墳には、熱した鉄をはさむ鉄鉗、金属を加工する鑿、ピンセットのような形をした鉄器などがおさめられていました。これにより、古墳時代の徳永一帯には、鍛冶を行う集団がいた可能性が高くなりました。金属を加工するには大量の燃料が必要ですが、南側には高祖山からのびる丘陵があり、山林資源の利用には好立地だったことでしょう。付近の集落や、この前後に営まれた近隣の古墳に眠る



■ 今宿から飯氏にかけて分布する主要な古墳と遺跡 ■ 德永A遺跡で出土した狩猟の道具（縄文時代）。黒曜石製の石鏃は長辺2cm程度の二等辺三角形だったとされる ■ 飯氏遺跡出土の蓋棺（弥生時代前期末頃）。飯氏遺跡では多数の蓋棺が見つかっている ■ 飯氏二塚古墳。今宿地区古墳群の首長墓のなかでは、最西端に位置する。写真は遺体を安置する部屋（玄室）の入口部分 ■ 德永古墳群I-3号墳出土の鍛冶関連遺物 ■ 飯氏の兜塚古墳で見つかった経筒。11世紀になると、筒に入れた経典を地中に埋めることが流行した。古墳の高まりは、經典を埋納する經塚とするには好都合だったのだろう。類例がない形とされてきたが、近年の福岡市博物館の研究によって、奈良国立博物館所蔵品（伝大分県出土）と同じであることが判明した。同じ工房・作者が製作したものか



人々のことを探るうえでも、重要なカギを握る古墳です。

### ● 吉備真備、怡土城をつくる

八世紀、高祖山には怡土城が築かれました。築城を当初担当したのは、大宰府に赴任していた吉備真備でした。彼は留学先の唐で兵学を学んだ経験があり、大宰府赴任中にもかかわらず、わざわざ都から武官が兵法を学びに来るなど、軍事に詳しいことが評判となっていた人物です。真備の伝記には、「議を建てて、はじめて筑前国怡土城を作る」とあり（『続日本紀』宝亀六（七五五年十月二日条）、築城自体が真備の建議によるものでした。

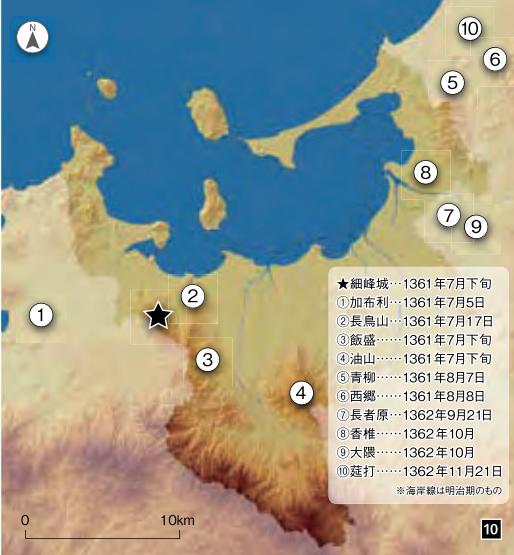
高祖山の山頂の稜線を東端として、西側斜面を広く使い、山すそにまで土壘をめぐらした怡土城の構造は、西側を大いに意識したものといえるでしょう。また、城の北側と南側の見晴らしの良い場所には、望楼跡と考えられる礎石群が見つかっています。このうち北側のものは、女原に一ヵ所、飯氏に二ヵ所、千里に一ヵ所、糸島市高来寺に一ヵ所の計五ヵ所にあり、城の北側を東西に横切る者をよく監視できるようになっていました。

幸い、この城が威力を發揮するような戦いは起こりませんでしたが、八世紀にはすでに、東西を

監視できるこの地域が、軍事上重視されていたことが分かります。そして、のちの南北朝時代になると、この場所をめぐって、南朝方と北朝方が直接戦闘を繰り広げることになるのです。

### ● 細峰城の攻防

康安元（正平十六、一三六二）年、南朝方と北朝方の合戦がこの地域で行われました。場所は「細峰城」の周辺。細峰城の具体的な場所は分かつていませんが、文和二（正平八、一三五三）年四月二十九日、「一色直氏預ヶ状」（『新修福岡市史 資料編中世1』一〇〇五頁）の「細峰城衆得永助五郎同一族」という記述から、徳永周辺だったと考えられます。細峰城での合戦のことは、南朝方の正平十六年九月「深堀時勝軍忠状」（『新修福岡市史 資料編中世2』七六五頁）と、北朝方の延文六（三月に康安と改元されたが、ここでは前の年号の延文を用いている）年九月「龍造寺家平軍忠状」（『同』九七一頁）に、それぞれの立場で記されています（軍忠状は合戦での軍功を上司に確認してもらい、のちに恩賞を受けれる際の証明としたもの）。この二通によると、まずは「加布利之城」が七月五日に「没落」しています。加布利は現在の糸島市加布里のことです。七月十七日には、深堀が「筑前國長鳥山御陣」に参上しました。長鳥山の場所は不明ですが、現在の西区周辺にあつたと考えられます。これ



7 写真の奥に見えるのが、徳永と飯氏の境の丘陵。西側のJR周船寺駅付近から撮影。細峰城の場所は不明だが、この丘陵は今でも北に細長いのがている。近年開通した福岡前原有料道路が、丘陵を切り通している様子がよく分かる

8 丘陵の徳永側から北を見た風景。今津湾や糸島半島の方まで見渡せる

9 「一色直氏預ヶ状」。宛所に「細峰城衆得永」と見える

10 1361～1362年に南北朝の合戦が行われた場所（推定）。現在の福岡市西部から東部へと南朝側の軍事行動が展開している



に続いて、細峰城の合戦と、飯盛・油山での戦いが起きました。「龍造寺家平軍忠状」には、この時点までの記述しかありませんが、「深堀時勝軍忠状」には、これ以降も糟屋郡の青柳や、宗像郡の西郷で合戦が続いている様子が記されています。深堀の方が記述がより詳しいのは、合戦が南朝優位に進められていたことを示しているといえます。

この合戦は、加布里から細峰城・飯盛・油山へと進んだのち、さらに東へと戦線が拡大しました。つまり、細峰城での戦いは独立したものではなく、南朝の大規模な軍事行動の一環と推測できます。この年に南朝方は、九州の拠点である大宰府を制圧し、征西府を置いており、九州における南朝の優勢は動かないものとなっていました。北朝は征西府攻略のために、九州探題として斯波氏經を送り込み、細峰城の合戦の翌年には、長者原において南朝方の菊池武光と戦いますが（長者原の戦い）、これも南朝方の勝利に終わりました。この戦いでは、蓮打（蓮内）・香椎・大隈と、南朝方がさらに東の広範囲に軍を進めています。

これらの場所は、防衛拠点となる要衝や交通の要地、宗教的施設などの重要地點である場合が多く、このような地域を南朝方が押さえようとしていたことがうかがえます。細峰城があつたと思われる徳永地域も、このような重要な地點の一つと考

えられていましたのでしょう。先の「一色直氏預ヶ状」によると、細峰城衆の得永氏に対しては、徳永地域にほど近い怡土郡の田尻など数カ所が兵糧料所として預け置かれており、徳永一帯が怡土郡と早良郡の結節点として機能していたことがうかがえます。

## ●西の防壁、菅氏？

慶長五（一六〇〇）年、関ヶ原の戦いにおける戦功として筑前国を与えられた黒田氏は、十二月には名島城へ入城し、家臣団も福岡へ移住しました。家臣の一人、菅正元は怡土郡内に一三〇〇石の地を拝領し、そのなかには飯氏村が含まれていました（菅氏家譜）。正元の嫡子、菅正利もまた、怡土郡内に三〇〇〇石を拝領しており、そのうち二五〇〇石は、徳永・周船寺・上原・篠原・飯氏村のなかから与えられています。さらに、その息子の菅主水も、同様に怡土郡の徳永・飯氏・篠原・井田・周船寺・多久村のなかに、三〇〇〇石を拝領しました（黒田長政印判状写）【福岡県史 近世史料編 福岡藩初期上】二〇一頁）。

菅正利は、黒田氏が播磨にいたときからの家臣であり、その数々の功績から、のちに黒田二十四騎の一人に数えられています。黒田長政の厚い信任を得ていたため、家督を譲る際には隠居が許されず、福岡城の南の丸にて城番となつたほどです。



11



12



13



14



15



16

彼には三〇〇〇石の知行のほかに、二〇人の与力とその従者、総勢一〇〇名の家来が付けられました（菅氏家譜）。そして、親族や従者らを飯氏村に置くように命じられています。

その理由について、「増益黒田家臣伝」（新修福岡市史資料編近世2）七〇頁は、「世上もし変もあらハ」、飯氏村の南にあつた高祖城を拠点として、西の守りとする意図があつたためと推測しています。筑前国領内の東側には、六端城が置かれ、幕府領や当時険悪な関係にあつた細川氏が治める小倉藩領との境域を守っていました。一方西側では、正利は黒田氏の筑前入国後まもなく知行を拠領しましたが、特に高祖城を整備するよう命じられた訳ではありませんでした。当時、怡土郡の西側半分は唐津藩領でしたが、領主の寺沢氏との間に問題がなかつたためと考えられます。そのため、どの程度の具体性をもつて、高祖城が有事の際の拠点として考えられたのかは不明とせざるを得ませんが、正利に当該地域が知行として与えられ、多くの与力と従者が付けられたことを考えると、この場所が西の防衛の拠点として位置づけられたという「増益黒田家臣伝」の話は、あながち根拠のないこととも思えません。

しかし、飯氏村における軍事的な意味は、平和な時代が続いたことで次第に失われたようです。寛永二（一六二五）年には、菅氏は秋月藩の家老と



11

『御国絵図』（元禄14（1701）年）。まるで志摩郡を分断するように、怡土郡がぐっと突き出た部分の丘陵あたりに、「徳永村」「飯氏村」と記されている

12 子孫の家に伝わる菅正利の肖像画

13 「黒田長政知行目録」。黒田長政から菅六介（正利）宛。「得永（徳永）村」「飯氏村」などの地名が見え、慶長6（1601）年3月15日に丘陵周辺の土地を与えられたことが分かる

14 「菅氏家譜」。菅正利から孫の正俊までの家の歴史を編んだもの。正俊の子、貞利が貝原益軒に師事した関係で、益軒が序文を記している（編者は益軒の甥である貝原好古）

15 『周船寺村誌』に掲載されている菅正元の墓

16 菅正元の墓は、かつてこの丘陵の奥にあったが、今は別の場所に移されている。写真左手は飯氏公園

なり、夜須郡へ知行替えとなっています。

## ついに貫かれた壁

この地域の丘陵の峰はその地形から、長い間、東西を隔てる存在でした。このこと自体は、近世に軍事上の意味が薄れても、あるいは明治時代に入り、周船寺・女原・飯氏・千里・宇田川原村と徳永村の一部が合併し（明治二十二（一八八九）年）、周船寺村として近代化の道を歩み始めて、人々にとつては変わらなかつたものと思います。たとえば交通路。近世の唐津街道、大正時代に敷設された鉄道（現 JR 筑肥線）、現代の国道二〇二号線といった、東西を結ぶ新旧の主要な交通路は、いずれもこの丘陵を北側に迂回（うかい）しています。

ところが近年、「福岡前原有料道路」が、この丘陵を切り通して開通しました。そして、ちょうどこの道路を境に、女原・徳永の北側では、平成九（一九九七）年から二十七年まで、福岡市による伊都土地区画整理事業が行われました。これにより、JR 九大大学研都市駅が開業し、その周囲には商業施設や新しいマンションなどが立ち並び、一昔前とは景色が一変しました。東西を隔てていた峰が役割を終え、今この一帯は、山を間近に臨む古くからの風景と、都会的なまち並みを兼ね備えた、新しいまちに生まれ変わりつつあります。■



21



22



17

17 「周船寺村鳥瞰図」(矢野佳泉画)。

『周船寺村誌』より転載。博多湾西部～周船寺・糸島を描いており、峰が平野部に突き出しているのが分かる

18 この地域を歩くと、よく小さな祠やお堂にめぐり会う。写真は女原の路地にある姫宮

19 JR九州大学駅から南を望む。山の手前は公園化された山の鼻1号墳

20 千里の小路

21 宇田川原の宇多神社

22 宇田川原と千里の境周辺



20



19



18

## 特集 COLUMN

### 獅子は地域の繁昌を祝うたり



2017年の元日は、市内全域で快晴に恵まれたようです。皆さんはどうのように過ごされましたか？

ここ西区宇田川原では、太鼓や笛の音、そして唄声が青空の下に響いていました。地域の氏神である宇多神社で、福岡市無形民俗文化財に指定されている、宇田川原豊年獅子舞が奉納されています。

宇田川原の獅子舞は、獅子のほかにも万作太郎、猿といった演者が登場し、演劇性の強い獅子舞として知られています。演者は地元の消防団員を中心とするメンバーで構成され、一方、芸能に欠かせないお囃子方は年輩者が中心とか。

神社での奉納の後は、慶事や賀の祝いのあった個人宅などに向かって獅子舞を披露します。接待を受けてちょっと一杯飲みながら、次の場所に移動する保存会の皆さん。青年層から年輩の方まで親しく声をかけあう姿に、皆さん仲が良いんですね、と聞いてみると、「小さい時からみんな知っとうし。それに仲悪くしてられんよ。こんな小さいことで」と笑顔が返ってきました。

宇田川原は30戸ほどの小さな地域です。このなかで民俗芸能を受け継いでいくのは、並大抵のことではありません。この地域で獅子舞が今も継承されている理由を、保存会長の大神尋文さんは、「若い人たちがみんな集まって、わいわい言いながら練習して、終わったらビールでも一杯飲んで、それが楽しみなところもあるから。私たちの若い時もそうやったよ」と語ってくれました。

宇田川原の獅子舞のいくつかの演目には「お家繁昌と祝うたり」という口上があります。正月に家々を訪っていく獅子は、新年をことほぎ豊作と繁栄を祈るおめでたいものであったのでしょう。現在の宇田川原の獅子舞は、世代を超えた地域の人々の結びつきの象徴でもあり、また獅子舞そのものが地域の人々が関わる機会の一つとなって、新たな結びつきを再生産しているともいえそうです。



# さがしてみよう! 路傍の祠堂・神仏MAP

(女原・徳永・飯氏・千里・宇田川原 編)



- この地図は、西区女原・徳永・飯氏・千里・宇田川原を中心とする、JR筑肥線以南の一帯を対象として作成しました（女原北・徳永北・大字周船寺を含む）。破線は対象エリアを示しており、各町域とは必ずしも一致しません。
- 地図には省略している道・池・河川などがあります。また、地形・道路は変化している可能性があります。実際に現地を歩いてみる場合は、詳しい地図をご用意ください。
- 地図で示す路傍の祠堂や神仏像などは、私有地に属するものが多くあります。立ち入りなどにはご注意をお願いいたします。

## 参考文献・資料所蔵・協力

- 【参考文献】糸島郡教育会編『糸島郡誌』(臨川書店、初版1927年) ●伊都歴史資料館編『怡土城とその時代』(伊都歴史資料館、1999年)  
 ●木下博文『福岡市博物館企画展示解説456 種塚フロンティア2015』(福岡市博物館、2015年) ●周船寺公民館編『昭和58年度樂周院大学 かがり火一公民館落成記念号 周船寺の歴史ー』(周船寺公民館、1984年) ●周船寺村誌編纂委員会編『周船寺村誌』(周船寺村役場、1961年) ●西日本文化学会編『福岡県史 近世史料編 福岡藩初期(上)』(福岡県、1982年) ●福岡県教育委員会編『福岡県文化財調査報告書第250集 福岡県の中近世城館跡II 一筑前地域編2ー』(福岡県教育委員会、2015年) ●福岡市合併50周年記念事業委員会さん委員会『福岡市合併50周年記念誌 すせんじ物語』(福岡市合併50周年記念事業委員会、2012年) ●福岡市教育委員会編『福岡市の文化財(無形文化財・有形無形民俗文化財)』(福岡市教育委員会、1988年) ●福岡市教育委員会編『福岡市の板碑』(福岡市教育委員会、1992年) ●福岡市教育委員会編『福岡市の庚申塔』(福岡市教育委員会、1999年) ●福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財調査報告書第1290集 飯氏遺跡群2』(福岡市教育委員会、1994年) ●福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財調査報告書第780集 飯氏二塚古墳2ー飯氏二塚古墳第2次調査報告ー』(福岡市教育委員会、2003年) ●福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財調査報告書第1189集 徳永A遺跡5ー第5次・6次・7次調査の報告(1)ー』(福岡市教育委員会、2013年) ●福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財調査報告書第1229集 徳永B遺跡3ー第4次調査報告ー』(福岡市教育委員会、2014年) ●福岡市住宅都市づくり推進部伊都地区整理事務所編『伊都地区 区画整理誌』(福岡市、2016年) ●福岡市立周船寺小学校百周年記念会編『教育百年史』(福岡市立周船寺小学校百周年記念会、1977年)  
 【資料所蔵】個人蔵(福岡市博物館寄託) ▶ P.4 ⑨ / P.5 ⑫ ~ ⑯ ●福岡市博物館 ▶ P.3 ⑥ / P.5 ⑪ ●福岡市埋蔵文化財センター ▶ P.3 ② ⑤  
 【転載】周船寺村誌編纂委員会編『周船寺村誌』(周船寺村役場、1961年) ▶ P.5 ⑯ / P.6 ⑰  
 【図版作成】P.3 ① ▶ 数値地図(国土基本情報 地図情報(福岡) 2015年発行 (国土地理院) を基に作成 (下図作成:川浪朋恵)  
 ●P.4 ⑩ ▶ 「新修 福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史」(福岡市、2013年) より転載して加工 (原図作成:宗建郎)  
 ●P.7 MAP ▶ 地理院地図(電子国土web) 2017年3月 (国土地理院) を基に作成 (下図作成:馬場昭夫)  
 【写真所蔵】福岡市埋蔵文化財センター ▶ P.3 ③ ④  
 【写真撮影】市史編さん室 ▶ 表紙 / P.2 / P.4 ⑦ ⑧ / P.5 ⑯ / P.6 ⑯ ~ ⑯ · 特集 COLUMN  
 【協力】宇田川原豊年獅子舞保存会 ●周船寺公民館 ●福岡市西部地域交流センターさいとびあ



レポート

## なつかしいまちの姿を探して

## ● 100年前の警固の切り通し、現る

本誌第21号で「四十八溪ウォーク」と題し、中央区の警固・赤坂・桜坂を紹介したところ、新たに古い写真が見つかりました。

これは、博多で「よきや陶器店」を営んでいた野村家のアルバムにおさめられていた1枚です。写真に付された記録によると、大正9(1920)年9月に撮られており、「下警固切割道ノ久八慶造」と題されています。「久八」「慶造」は被写体の2人の男性(写真を提供してくださった野村さんのお話では、ご親族とお店の番頭さんとのことです)、撮影した場所は「下警固」の「切割道」(山を切り開いた、切り通し道)ということを意味しています。野村家は現在の桜坂(旧下警固)に別邸を持っていましたので、そこを訪れた際の1枚なのでしょう。

下警固の切り通しといえば思い出されるのが、本誌第21号の表紙の写真です。両側に迫り立つ壁のような崖、ゆるやかにわん曲しながらのびる道。この2枚はその様子だけでなく、偶然にも構図までよく似ています。この周辺で、「切り通し」と呼ばれた場所がほかには見あたらないこともあわせて考えると、この写真は第21号の表紙のおよそ100年前の姿とみて良いでしょう。

それにしても山奥のようなこの風景、現在でも緑豊かな場所とはいえ、とても想像できない姿です。明治時代の新聞で、「……警固の谷と云へば夜は狐狸の化競べの場所と相場が極り」(『福岡日日新聞』明治44(1911)年1月12日「福岡市の周囲(九)何處まで発展するか」と言っていたことが、この写真でようやくうなづけました。



▲撮影：野村久吉／1920年



「市史だより Fukuoka」第21号表紙▶



▲撮影：上杉厚／1960年代

## ● 埋め立て地を走る

そしてもう1枚。本誌第22号では、シーサイドももちを特集しました。その際、海が埋め立てられた頃の様子について、いろいろな方からお話を伺いました。この写真は、その時に見せていただいたものです。

撮影者の上杉厚さんによれば、撮った場所はシーサイドももちではなく、その東隣、西公園(福岡市中央区)の下辺りではないかとのことでした。数度にわたった西公園付近の埋め立てが終わるのは、シーサイドももちよりもさらに前、昭和40年代半ばのことですから、その頃までに撮影された写真ということになりそうです。

埋め立ての写真といえば、工事の様子や空中から撮った素っ気ないものが多いのですが、この写真からは、夢中で遊ぶ子どもたちの楽しげな声までが聞こえてきそうです。海でもなく、まちでもない、子どもたちの大きな遊び場だった、ほんのわずかな時期の貴重な1枚です。

市史編さん室では、福岡市内の古い写真を探しています。  
お心当たりの方がいらっしゃいましたら、市史編さん室までご一報下さい。

連絡先

092-845-5245

福岡市博物館 市史編さん室(福岡市早良区百道浜3丁目1-1)

大募集

## ○ 考古

平成三十二年刊行予定の『資料編考古2』に掲載する遺跡の選定がようやく終わりました。この巻では福岡市域の東部（東区・博多区・中央区・南区）を対象とし、のべ一二〇の遺跡についてご紹介する予定となりました。

いよいよ、執筆・編集作業の開始です。掲載する遺跡の中には、水田跡で有名な板付遺跡（いたづけ）、巨大複合遺跡である比恵・那珂遺跡群（ひえ・なかごせきぐん）、博多遺跡群、古代外交の窓口であった鴻臚館跡など、著名かつ大規模な遺跡が数多くあります。

内容・頁数ともに、読みごたえのある一冊になりそうです。刊行までにはまだまだ時間がありますが、どうぞご期待ください。

## ○ 近世

江戸時代、福岡藩には八〇〇にものぼる寺院が存在しました。福岡藩はこれらの寺院を個別に管理・統括するのではなく、宗派ごとに一〇三ヵ寺の「触頭」（ふれがしら）を設定し、その役目を彼らに任せました。「触頭」となった寺院には、中世から続く寺院もあれば、創建の年代は新しくとも、黒田家との深い関わりがうかがえる寺院もあり、その由緒は様々です。

それら「触頭」のうち、現在確認できる由緒を『資料編近世3』には掲載します。従来刊行されている地誌類では確認することができない内容も多く含まれますので、どうぞお楽しみに。

## ○ 古代

『資料編古代』には、多種多様な資料を掲載する予定です。資料は紙に書かれたものとは限りません。たとえば、経筒。平安時代、經典を書き写して、金属や石などでできた経筒（容器）に入れ、地中に埋めることができました。西油山（にあぶらやま）で出土したという滑石製の経筒には、埋めた時の事情が豪快な文字で刻まれています。それによると、発願した僧「経得」は、書写の完成を見ずに亡くなってしまったようです。約半年後、集まつたゆかりの人々によって埋納が果たされました。「経得」の無念さと、彼と周囲の人々との関係性に想像がふくらむ珍しい資料です。『資料編古代』は、バラエティーに富んだ資料集になりそうです。

紀行文も今日に伝えられています。

これは宗祇（ぶんし）が文明十二（一四八〇）年の九月から十月にかけて、山口から博多を旅した三六日間の記録ですが、連歌の資料としてはもちろん、当時の博多の様子を知るうえでも貴重な資料です。ほかにもいろいろな資料を用いて、多角的に中世の博多を紹介していく予定です。

## ○ 近現代

『資料編近現代3』（平成三十四年刊行予定）の編集に取りかかりました。明治年間に近代都市として始動した福岡市が、大正（昭和初期）に「モダン都市」へ変貌していく様子を、市域拡大、水道、都市計画、交通、消費といった側面に注目して資料を収録します。

既刊『資料編近現代2』では、一四〇〇頁に及ぶ、異例の分厚い資料集になってしまい、一部資料の収録を見送りました。今回はその「宿題」を回収しなければならないため、頁数が前回を上回るのではないかという観測もなされ、早くも戦々恐々としています。

## ○ 中世

『資料編中世3』に収録される予定の資料には紀行文も含まれています。

中世の紀行文というと、「十六夜日記」のよう

な鎌倉時代に京都から鎌倉への道中を記録したもののが有名ですが、連歌師（れんがし）である飯尾宗祇（いおむぎ）が記した「筑紫道記」のように、九州・福岡を舞台とした紀行文も今日に伝えられています。

## ○ 民俗

『民俗編2』のため古い新聞を調査していますが、日々面白い記事に出会います。一例として、明治十八（一八八五）年一月二十九日の福岡日日新聞に「七度半の習慣」という記事があります。商法会議所の会議がいつも遅刻者多数で、使いを七度出して八度目にやっと来るという内容です。祭事で神や賓客を迎えるため幾度も使者を送る行事「七度半の使」（しちどはんのかい）に因んだもので、それくらい腰が重いの意でしょう。関係者はこの弊習を廃そうと反省しますが、一方「矢張博多の習慣を以て此の約束を締めんとて一同三度手を拍（う）ちて」と手一本で決議するのが博多らしい話もあります。「弊習」と「習慣」がせめぎ合う当時の様子が窺えます。

# 新修 福岡市史

## ナナメ読み

その3 資料編 近世2 家臣とくらし

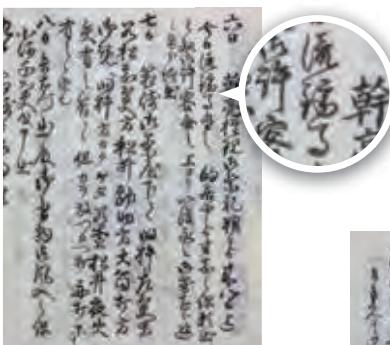
### 武士たちの日常—福岡藩士の日記を読み比べる

合戦がなくなつて「泰平の世」となつた江戸時代、武士たちはどのようにくらしていたのでしよう。ドラマなどで見る様子のほかは、まったく想像がつきません。そういうえば、少し前には、武士の生活をとりあげた映画『武士の家計簿』(監督森田芳光・原作磯田道史)が話題になりました。みなさん、少なからずこうした関心をお持ちなのかもしません。

『新修福岡市史 資料編 近世2 家臣とくらし』(平成二十六年発行)には、このような武士たちの日々のくらしを綴つた記録が載つています。たとえば『菅重遠覚書』。重遠は無足組(中層家臣)の家格の一つ。領地を持たず、俸禄でくらしていたに属した武士で、書物を管理する「御書物預り」の役職を、四四年にわたって務めた人物でした。『菅重遠覚書』は彼の日記です。このなかで重遠は、無足組の組合や友人・知人とのつきあいについて、たくさん書きとめています。なかには、藩士の妻子の家出や駆け落ちなどのスキンシップまであります。ちなみに、能勢左衛門なる人物の後妻が病死した際に

は、狐憑きが疑われたとか……。人の尊好きはいつの時代も同じなのです。重遠が藩士たちのプライベートに关心を抱き、精通していた様子がうかがえます。

『天保四癸巳覚書』  
(九州大学附属図書館付設記録資料館蔵)  
無足組菅右衛門重遠の日記。記事の幅は広く、勤務の記事だけにとどまらない。この写真では流鏑馬、箱崎御茶屋下での大砲の調練、御書物の虫干しの記事などが確認できる



『(仮題) 日記』▶  
(九州大学附属図書館付設記録資料館蔵)

『殿中日記』と総称されることが多い、福岡藩家老三奈木黒田家当主の日記。私的な記述ではなく、日々の政務の記録が綴られる



今回の  
ナナメ読みは



A5判 上製本(函入り) 1,100頁  
価額 5,000円(税込)

藩士について詳述する一方で、藩主黒田長溥(ながひろ)(齊溥)の実父、島津重豪の死去については、死後しばらくしてから書いています。同じく『資料編近世2』に収録されている『殿中日記』(福岡藩の筆頭家老、三奈木黒田家当主の日記)には、重豪が死去する前からその病状が刻々と記され、緊張感が伝わってくるのとは対照的です。情報通の重遠も、立場の違いから知ることができない情報があったことが、二つの日記を比べるとよく分かります。

『資料編 近世2』には、この二つのほかにも、福岡藩士の日記をいくつか収めています。おもしろいのは、すべて天保四(一八三三)年のことを記したものを選んで収録していることです。並べて読んでみると、当たり前のことながら、同じ日を、家臣たちがそれぞれの立場で、それぞれ生きていたことを改めて実感します。これら一つ一つのくらしや思いの集合こそが、「泰平の世」の武士たちの姿なのでしょう。なんだか武士が身近に思えてきました。

#### 電話申込み・店頭販売

▷ 福岡市博物館 ミュージアムショップ (福岡市早良区百道浜3丁目1-1)

📞 092-823-2800

#### お問い合わせ先

▷ 福岡市博物館 市史編さん室 (福岡市早良区百道浜3丁目1-1)

📞 092-845-5245

店頭販売

- ▷ ジュンク堂書店 福岡店 (福岡市中央区天神1-10-13) ☎ 092-738-3322
- ▷ 丸善 博多店 (福岡市博多区博多駅中央街1-1 JR博多シティ8階) ☎ 092-413-5401
- ▷ 黒木書店 長住店 (福岡市城南区西長住2-25-28) ☎ 092-562-1052
- ▷ 黒木書店 七隈店 (福岡市城南区七隈8-12-16) ☎ 092-871-2329



# タイムマシンで となりの駅へ

—近過去への旅—

第3回

文=有馬 学(福岡市史編集委員会委員長/福岡市博物館長)

絵=新田 岳(cubicface Inc.)

text\_Manabu ARIMA, illustration\_Takeshi NITTA

## 一身にして三生を経る? ～その2～

前回は本題に入る前に終わってしまいました。スマセン。

私のような、敗戦の年に生まれて戦後しか知らない人間にとっては、経済の高度成長による日本列島の激変こそが、福沢諭吉の言う「<sup>いつしん</sup>一身にして<sup>によう</sup>二生」なのではないか。

それが前回の主旨、というより標題の「一身にして三生」の半分の主旨でした。

前回いくつか例を挙げて説明したように、高度成長による社会変動が誰の眼にも明らかになってみると、それ以前の社会はまるで外国です。それは明治維新に劣らぬ、いやそれ以上の激変と言うべきでしょう。

私には、近代日本経済史の分野で大きな業績を残した中村隆英先生の、次の指摘が印象に残ります。

「戦前以来、日本の課題は欧米に追いつき追い越すことであった。その目標が日本人がほとんど気がつかないうちに達成されたのが1970年代であった」(『昭和史II』1993年)

この指摘で重要なのは、「日本人がほとんど気がつかないうちに」という部分でしょう。欧米に追いつき追い越すという課題がおおむね達成される。明治の日本人の何人が、いつかそんな時代が来ると、願望や決意などではなく、リアリティをもって信じたでしょうか。

そう考えれば、高度成長による日本社会の激変ぶりが私たちにとっての「一身にして二生」であることは、認識の問題ではなく事実の問題です。

私の言うことは、もちろん歴史の後知恵です。渦中にいる人間は、変化に気がつきにくい、あるいはそれを正確に認識することが難しいものです。

だから比較の視点が必要なのです。他の時代と比較することで、現在がよりよく理解できる。近代日本に何度か訪れた、後世から見れば大きな転換点と比較することで、変動する〈いま〉が何なのかを認識することが、あるいは何なのかと問うことが可能になります。そこから、「一身にして三生」仮説が導き出されるのです。

高度成長がもたらした巨大な変化が、どの家にもクルマがある社会の実現だったとすれば、クルマを持つ事への興味が失われた社会の到来は、やはり巨大な変化と言ふべき

でしょう。戦後の高度成長をもたらしたものが、明治から続くモノ作り日本だったとすれば、モノ作りの衰退と、ゲームやアニメに担われた経済社会の到来は、高度成長に比肩されるべき巨大な変化だと思います。

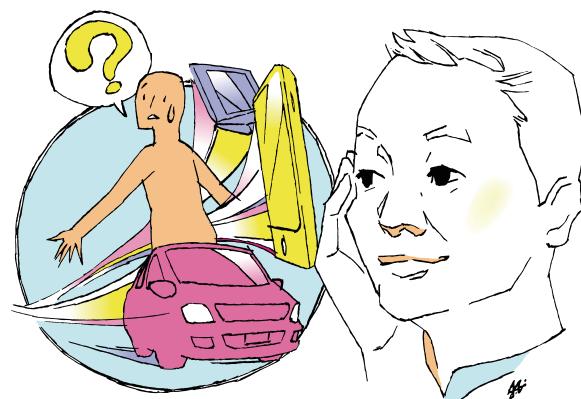
現代の世界を情報化とグローバル化として特徴付けることは、今や誰でもが考えることです。あまりにも陳腐かもしません。しかし、それをありふれた陳腐な認識と考えてしまうことで、そこに生じた大きな変化まで見逃してはいけません。

私のような世代の人間が〈いま〉を生きることは、「一身にして三生」なのです。

「近代」という言葉は、日本人にとって長い間、獨得の意味を帯びていました。多くの知識人は、日本の近代は眞の「近代」ではないのではないかと自問してきました。しかしそのような問い合わせを一気に無効化してしまったのが高度成長でした。それは、モノ作りを基軸とする先人の努力によってもたらされたものです。しかし、その結果生み出されたのは、そう呼んでいいならハイパー・モダンの世界です。

そのような変化のなかで、福岡市は全く新たな歴史的ステージに入っているように見えます。中村先生の言葉を借りるならば、それは私たちが「ほとんど気がつかないうちに」生じていたのです。

違う言い方をすれば、モノ作り基軸の社会の転換が、福岡市の「離陸」をもたらしているように見えます。そのような時代が好きか嫌いかはしばらく置いて、私たちはそのことに深く注意を払うべきではないでしょうか。



## 福岡市史への歩み

volume 22

文=田坂大藏（福岡市博物館研究指導員）  
Text : Daizo TASAKA

平成10（1998）年11月6日の「福岡市文化賞」表彰式後の立食交流会の席上で、桑原敬一市長（当時）が、受者をはじめ幅広い文化関係者に、本格的な市史の編さんを約束し、出席者一同大変喜んだことは、これまでお話しした通りです。しかし、筆者は手放しでは喜べませんでした。前回お話ししたように、市役所内で議論されていたにも関わらず、その後の方向性がなかなか見通せなかったからです。

一般的に、同様の事業が続けて採択されるのは考えがたいことですし、市役所では多くの重要事業が順番を待っています。11月といえば、次年度の予算編成の骨格がもうできているはずです。市史編さん事業は単年度経費でみれば、高額ではないかもしれません、3年や5年で行う規模の事業ではありません。とりわけ、福岡市は歴史事象に事欠かないことが知られているだけに、長期に及ぶのは明らかです。市長の心配もそこにあったのかもしれません。

しかし市長たる者が、民間人の前で一時の口をすべらせたとも思えません。文化関係者は小躍りせんばかりだったのですから、市長が事務当局をうまく説得してくれて、少額でも良いから、足がかりになるだけの予算が付けば、彼らも真実喜んでくれるだろうと思っていました。そしてそうなれば、市長の

思い入れがどの程度のものなのかを知りうる好材料になるとさえ、密かに思っていたのです。そんなことでしたから、表彰式から9日後の11月15日に市長選挙が行われることなどは、頭の片隅にもありませんでした。そして、現職市長が落選するという劇的な出来事に遭遇することになったのです。

トップが交代すれば、方針変更があるのは世の常でしょう。それがどのような形で現れるのか、筆者だけでなく、ほかの関係者も固唾をのんで、新年度予算の発表を待ちました。表彰式の際に市史の編さんを市長に懇請した武野要子教育委員（当時）からも、「大丈夫よね？」と書かれた年賀状を頂いたのでした。

市史編さん室は市役所本庁舎の総務局に置かれていましたので、教育委員会に所属していた博物館からは、地理的にも、感覚的にも遠く、うかがい知ることはほとんどありませんでした。しかし、前市長の言というのがあったのか、本来は完結とされてもおかしくない市史編さん事業は、わずかの予算で、首の皮一枚を残してもらったという話が伝わってきました。僥倖というほかありません。

新市長が自治体史編さんをどのように考えてくるのか、これからまた新しい戦いが始まるのです。

## 表紙の写真 お堂と石碑に出会う〔西区飯氏〕

特集の取材の日の出来事です。飯氏を歩くためにJR周船寺駅で電車を降り、福岡前原有料道路・今宿バイパスを横切つてしまふと、分かれ道に突き当たりました。そこには飯石神社と觀音様への道しるべ。おもわず撮ったのが表紙の写真です。ふと横を見ると庚申塔、近くには小さなお不動さんのお堂もあります。道しるべに誘われるままに進んでみると、飯石神社が見えてきました。神社の横に目をやると、飯氏公園のそばに立派なお堂が立っています。これが觀音様かと思ひきや、薬師堂と書いてありました。おかしいなど周りを見渡すと、公園からずっと奥の方に入った、こんもりとした丘の木々の間からも、かすかにお堂が顔のぞかせています。近づいてみると、「蓮華寺」という扁額がかかっていますが、どうやらこれが道しるべにあった觀音様のようです。後日、近世の地誌である『筑前国続風土記附録』『筑前国続風土記拾遺』をめくると、觀音堂がかつてこの辺りにあった蓮華寺の跡であることが記されていました。今回特集した峰々の谷間やふもとを歩いてみると、ほかの場所でもこのように次々とお堂や石碑に出会います。楽しくなってしまい、ついつい探し歩いてつくったのが、P7の「さがしてみよう！路傍の祠堂・神仏MAP」です。編集担当者総出で、対象エリアをくまなく歩いたつもりですが、こんなにたくさんあつたら、まだまだ見落としたものがあるかもしれない、今でも不安なくらいです。みなさんもぜひさがしてみてください。



飯石神社に向かう道。心地よいゆるやかなカーブが連続しています



飯石神社。瓦葺きの屋根が印象的



遠くの丘に、かすかなお堂の影が…



木々に囲まれた觀音堂（蓮華寺）を見つけました

## お詫び

「市史だよりFukuoka 22」に掲載の「特集」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。▶ P2 地図 ヤフオク! ドームの位置



福岡市史についての最新情報はこちらから。「市史だよりFukuoka」のバックナンバーも見られます！  
福岡市史ホームページ ▶ <http://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/>

福岡市博物館の情報はこちらから。

福岡市博物館ホームページ ▶ <http://museum.city.fukuoka.jp/>

Printed in Japan.

Copyright by Fukuoka City Museum

本誌掲載の写真・図版・記事などの無断複写・転載を禁じます。